【報告】第 90 回民族学研修の旅

# インドネシア、ニアス島とスマトラ島北部の住まいを訪ねる

講師：佐藤 浩司（民博准教授）
期間：2018 年 3 月10日（土）～18日（日）

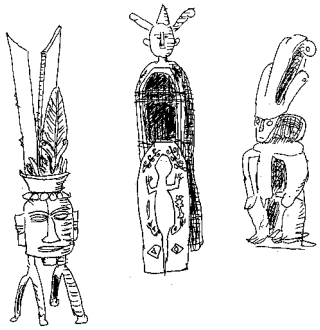
一万を超える島々に二〇〇以上の民族が暮らすインドネシア。ここでは島ごと、民族ごとに異なる個性豊かな木造家屋が生み出されてきました。インドネシアの家屋や集落には、配置や方位、装飾やシンボリックな形状などに人びとの世界観をみることができます。一方でこうした伝統家屋は、現在の暮らしに照らし合わせると利便性に乏しいことも多く、家の住み手や作り手が途絶え、あるいは文化財として保護する目的ばかりが先行して住民不在となる例が多くみられます。第九〇回民族学研修の旅では、人びとが実際にそこで生活を営む「住まい」として機能している伝統家屋・伝統集落を求めて、ニアス島とスマトラ島北部を訪ねました。

集落の構成、家屋の構造など、造形的な面白さもさることながら、伝統的な石跳びの練習を憧れをもって遊びに取り入れる南ニアスの子どもたち、間仕切りのない一軒家に八家族が暮らすスマトラ島ドカン村の住人の姿に、核家族社会では出会えない住まいのあり方をみることができました。また現地の日常を可能な限り体感しようと、歩き・訪ねた「フィールドワークの九日間」でした。参加者のまなざしとともに、旅の様子を紹介します。

③勇猛な戦士を育んだ南ニアスでは勇者の証に巨石跳びをおこなう。跳躍用の石積みの台は高さ2m 程度。子どもたちは遊びのなかで技を磨く

①北ニアスの家屋。ニアス島では南部北部ともに、道に面した壁面に窓があり、屋内窓際にはベンチが設けられている

④高さ 20m に達するバウォマタルオ村のオモセブア（左）はインドネシア最大の木造家屋



ニアス島文化遺産博物館におさめられた文化財

② 2005 年の津波災害のあとに JICA の支援によってできた市場。魚が豊富

■写真
猪股玲子さん、佐藤善秀さん、高田真理さん
中坪功雄さん、事務局
■スケッチ
椙田道行さん

## 【行程】

■3月10日（土）
出国。インドネシアの首都ジャカルタで乗り継ぎ、スマトラ島メダンへ。

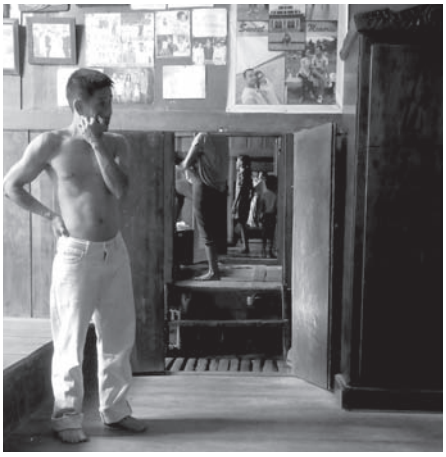
■3月11日（日）
早朝、空路ニアス島へ移動。上空から噴煙たなびくシナブン山火口を望む。到着後北部の集落へ。ニアス島は南北で文化が異なり、家屋や集落形態にもそれが顕著。北部では大規模な集落を形成するような社会制度が発達せず、現在、住居は道沿いに点在する。家屋は楕円形平面の高床建築で、床下には斜材が組まれている。村人の家にお邪魔し、豚肉とシリーピナン（噛みタバコ）を味見。その後、讃美歌の響く街の市場へ。午後、ニアス島文化遺産博物館を見学。ニアス島の民俗文化財の散逸を惜しんだドイツ人修道士の収集品を基盤に、武器や墓標、家屋模型などが展示されている。石彫や木彫に島内で育まれた優れた彫刻技術を実感。夕方、ニアス島南部へ。①

■3月12日（月）
朝、JICA の支援でできた市場を見学。その後終日、南部の六集落をめぐる。集権的な社会制度が発達した南部では、計画的な大規模集落が生まれた。いずれの集落も川下から川上に向かって走る石畳の道を挟んで家屋が軒を連ねる。矩形平面の高床建築の家屋は二棟一組になっており、棟と棟の間にそれぞれ入口をもつが、反対側の壁面にも扉があるため、集落全体で屋内を行き来できるというユニークな構造。どの集落でも道に穀物や洗濯物が広げられ、子どもたちの遊ぶ姿が目にとまる。南ニアス最大規模のバウォマタルオ村で夕食に家庭料理をいただく。希望者は一般家庭に分宿、集落の居酒屋でヤシ酒を楽しんだ。②③

■3月13日（火）
午前中バウォマタルオ村で過ごす。朝、昼食にいただく儀礼食の準備を見学。切り分けた豚肉は立場によって供する部位が決まっている。昼食までの時間、オモセブア（首長の家）、バレ（集会所）を見学したのち、民俗舞踊と伝統

⑧カロ・バタック人の住むドカン村の家屋（屋内）。
４つの囲炉裏が設けられ、８家族が共に暮らす

⑤オモセブアの内壁に施された彫刻。ニアス島では巨石記念物や家屋の柱、壁面に見事な彫刻を見かける



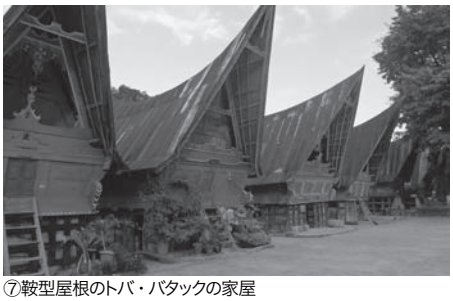
⑥南ニアスの家屋は扉を開けると集落全体の行き来ができる。ニアス島の家屋には窓があるため明るく住みやすい

## 参加者の感想

住まいとして機能している伝統建築を、外観だけでなく、内部まで見ることができ、さらにそこで暮らす人たちとともに過ごした経験は大変貴重で価値あるものでした。南ニアスでは目の前の自然から得た新鮮な食物を食べ、たくさんの輝かしい笑顔の子どもたちと遊び、カロ・バタックの村では大家族で支え合いながら暮らす人たちに出会いました。人間にとっての本当の豊かさを考えさせられる旅でした。（渡邉友二さん）

小学生の頃に読んだ学習雑誌に、インドネシアの戦前から独立を舞台にした日本人の物語がありました。子どもの頃の興味が募り、ついにニアス島まで来ました。カロ・バタックのお宅では旧日本軍で働いていたおじいさんが日本の唄を歌ってくれました。子どもの頃の経験はすごいです。この旅で出会ったインドネシアの子どもたちに、私たちとの出会いがよい記憶としてのこるよう、自分もまた笑顔でいたいと思いました。（本間直子さん）

⑨ドカン村の家屋。壁面を囲う模様はヤモリを表している



⑦鞍型屋根のトバ・バタックの家屋

⑩賑わいを見せる屋台街

バタック人の踊り。ボロタンとよばれる棒に繋がれた、水牛を囲んで踊る

的な石跳び（勇気ある者の証。各集落にひとつずつ石積みの跳躍台がある）を鑑賞。午後、バウオマタルオ村の前身となったオラヒリ村まで歩いて移動。途中、結婚式と葬式の二行に遭遇。夕方、北ニアスに戻る。④⑤⑥

■3月14日（水）
空路ニアス島からスマトラ島へ。アブラヤシやゴムノキのプランテーションを見学しながら、世界最大のカルデラ湖・トバ湖の中央に位置するサモシル島を目指す。トバ湖はトバ・バタック人の故地で、集落や野外博物館で鞍型屋根の伝統家屋をみることができる。家屋は本来穀倉と向かい合って建てられ、聖なる山の方角に向かって入口が設けられる。⑦

■3月15日（木）
バタック野外博物館で民俗舞踊を鑑賞。その後スマトラ島本島に戻り、ドカン村へ。カロ・バタック人の伝統家屋で、実際に人が居住しているのはドカン村の五棟のみ。間仕切りの無い一軒家には四つの囲炉裏が据えられ、ひとつの囲炉裏を二家族が共用しながら八家族が暮らす。本来は血縁・婚姻関係にある家族が同居する家だが、いまは持ち主が借家として貸し出すことで建物が維持されている。妊婦や老齢の夫婦、子連れの二家など様々な年代の人が同居していた。講師おすすめのコーヒー生豆を購入。⑧⑨

■3月16日（金）
フルーツマーケットに立ち寄ったのち、メダンの空港へ。途中、ドリアンをたっぷり試食。夕方、空路メダンから首都ジャカルタへ移動。夕食後、希望者で連れ立って市内の屋台街へ。これまでの滞在地とは打って変わって首都はイスラーム文化圏。ノンアルコールビールが積極的に売られていた。⑩

■3月17日（土）
朝、植民地時代の建物がのこるコタ地区を散策したのち、市内のデパートで買い物。昼食後、国内各地の伝統家屋を摸したパビリオンが並ぶタマン・ミニを見学。旅行中初めての雨。夕食後、ジャカルタ郊外の空港へ。

■3月18日（日）
帰国。